

平成 21 年度卒業設計優秀作品の選定経過と講評

大阪市立大学工学部建築学科 卒業設計優秀作品選定委員会
2010 年 03 月 24 日

1. はじめに

本年度からは、昨年度までの公開審査会ではなく、公開講評会として運営することになった。それは、必ずしも賞を決めることだけが目的ではなく、各作品に対して十分な議論と講評を行おうという趣旨である。そのために、講評会選出の全作品について学生プレゼンテーションを行い、また審査委員の数を絞り込んだことも本年度からの大きな変更点である。

2. 卒業設計優秀作品選定委員会

卒業設計優秀作品選定委員会は、学内および学外の下記8名の審査委員によって構成される。

<ゲストクリティク>

キドサキナギサ (建築家・城戸崎和佐建築設計事務所主宰)

長田 直之 (建築家・有限会社 ICU 一級建築士事務所主宰)

<卒業設計担当非常勤講師>

山内 靖朗 (建築家・藤の家建築設計事務所)

<学内委員>

吉中 進 (建築構造分野)

木内 龍彦 (建築防災分野)

梅宮 典子 (建築環境工学分野)

宮本 佳明 (建築デザイン分野)

徳尾野 徹 (建築計画分野)

3. 選定の経緯

優秀作品候補

学科判定会議において専任教員による採点成績上位8作品までが、まず優秀作品候補として選出された。加えて遅刻作品ではあったもののアイデアの面白さと図面の密度の両面を評価された1案が、慎重な合議の末、あくまで例外的措置として公開講評会に選出と判断された。

プレゼンテーション

全9作品について順次、学生プレゼンテーションと質疑応答を行った。

第1回投票

9作品について一人あたり持ち票3で自由に投票を行い、まずは票の入らなかった2作品を優秀作品候補から外した。さらに1票または2票獲得の3作品については再度吟味した上で、同じく賞の対象とはしないことを確認した。その結果、満遍なく票を分け合った足立(5票)、上杉(5票)、堀野(4票)、林(5票)の4作品がスムーズに賞の対象として残った。

第2回投票

第1回投票時における3票の内の重み付け(3作品の内、最優秀に相応しいのはどれか)を参考にしながら、3作品の推薦理由について再度各委員が説明。その上で、持ち票1で4作品に対して投票を行った。その結果、足立・堀野が各3票、上杉・林が各1票と明かな差がついたため、この時点で各委員に確認の上、上杉および林を佳作とすることをまず決定した。

第3回投票

足立・堀野の2作品について、改めて各委員に講評を交えながら最優秀作品1点を絞り込んでもらう。すなわち決選投票である。7人の委員の票は割れ(木内委員は投票を辞退)、4票を獲得した足立が最優秀賞、3票の堀野が優秀賞に決定した。

4. 入選作品の講評

最優秀賞：足立優太 multifaceted building

ほぼ建築家の委員の票だけで勝ち残った。土地が、カシヤカシヤとルービックキューブのように90度回転する様子を、建築家の頭の中にイメージさせることが出来た時点で君の勝利だ。しかし、固い。ダサい。設計は生き様が投影されるもの(逃れられない)。とだけ言っておく。悩め。

優秀賞：堀野彩 地形と建築の間

ちゃんと出来ていました。でも愛せなかった。残念ながらそれは、ゲストの先生方を含めて。「よごれ」ということを学んでください。ダリがなぜ筆を折ってシュールレアリズムに走ったのかとか。10年くらいかかるとは思います。そのことを全身全霊で伝えておきます。「なんで一段一段なんだろう」、そんな世界です。

佳作：上杉昌男 MUSEUM

「卒業設計日本一」を逃した作品として長く記憶されるだろう。敗因は、自分の作品の面白さを正確に理解していなかったこと。もどかしいが、それを教育で教えることはできない。あなたの作品なのだから。早く一人前の建築家にならないと、プログラムは僕にパクられると思います。

佳作：林晃輝 Con-Create Dam

最終エスキース講評会の時の高揚を覚えているだろう。君が1番だったのだ。なのに。食べたこともない高級食材を料理しろといっても無理かもしれないが。教育の限界だ。自分自身で、もっと遊んでつかみ取れ！人生短いぞ。

5. 総評

細かい講評はどうでもよいと思います。

全体に器が「小さい」ということの方が余程問題であろう。卒業設計とは、これから始まる「建築人生」へのマニフェストである。ここで大風呂敷を広げずして、一体どこで広げる。

はっきり言って設計は楽しい。常識的に見れば、現実には明らかに苦しいことの方が多いのかもしれないが、今死んでしまったとしても「ああ、楽しかった」と言える。それが設計の力である。だからソガベもツカモトもテヅカのアホもリケンさんもイトウさんもアンドーさんも、年齢とか関係なくお互い建築家として共感しあえるのだよ。(フジモト、ヒラタあたりはまだちょっと分からないが。)もちろんキドサキ先生、長田先生はその同じ共感の上に立ってコメントを下さっているのだ。そしてもちろん、意見そのものはそれぞれに異なる。いずれにせよ、市大は過渡期であろう。

日本経済はこのまま沈没するか、まあ浮上することはもうないと思うが、建築を含めたデザインだけは世界から尊敬されていることは忘れないでほしい。無理にランキングするなら、いま間違いなく世界一でしょう。日本が生き残るすべはこれしかないと思います。海外の設計事務所で日本人の若者がどんだけ働いていることか。つまり、ここ(公開講評会)での評価は世界に通じるとは思ってもらって構いません。もちろんこの講評文もその水準に立って、責任を持って書いています。

だれ(どの先生)にどういう評価をされたいか、それだけだ。30年前、林雅子にくそばああと叫んで講評会を後にしたやつが居たが(私だ)、五分と五分の勝負だよ、この世界、一生。だから無冠に終わった学生も自信を持っている。いま自分が教員として改めて肝に銘じたいと思うのは、評価する側が、逆に評価されているということだ。

がんばれ

(文責:宮本佳明)